
ルーデル閣下が遠坂凜に召喚されたようです

E K A W A R I

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ルーデル閣下が遠坂凜に召喚されたようです

【Nコード】

N7109W

【作者名】

E K A W A R I

【あらすじ】

もしも、聖杯戦争に召喚される英霊が死後100年以内の近代・現代英霊だけだったら？凜が召喚した英霊がハンス・ウルリッヒ・ルーデル大佐だったら？これはそんなIFの短編読みきり小説。とりあえず一言、ルーデル自重しろ。

この作品は小説投稿サイト、「Arcadia」様にも投稿させていただきます。ご了承ください。

(前書き)

どうも、ばんははろ、E K A W A R I です。

今回の話は同じくF a t e系の連載小説である「うっかり女工ミヤさんの聖杯戦争」で銃撃戦のシーンを執筆していた時に、全部死後100年以内の現代&近代英霊縛りな聖杯戦争とか面白そうじゃね？と思って考えた話です。

本命はフィンランドの白い死神、シモ・ヘイへだったんですが、ぶっちゃけ連載二個も抱えている身としてはこれ以上連載とか無理なんで、読みきりで書くならキャラ立ち具合からルーデル大佐のがりやすそうだなあと思ったんで、ルーデルを主役にしました。

なので、たとえこの話が好評になって続きを望むコメがきたとしても、続きは絶対書かないです。これ以上連載とか無理。だが、続きを自分は見たいので書ける人は是非書いて・・・げふんげふん。というわけではじまります。

9月17日、理想郷のほうでもらったツツコミを参考に大幅に書き直しました。

聖杯戦争という魔術師の大儀式がある。

それは日本の冬木市という街で、数十年に一度の割合で開かれる、万能の願望器「聖杯」を求めての殺し合いの儀式。それに参加する7人の魔術師のことをマスターと呼び、彼らはそれぞれ聖杯戦争の主駒である英霊と呼ばれる存在・・・生前英雄と呼ばれたものが死後人々に信仰されることによって、精霊と同格にまで霊格を押し上げられ奉られた人間霊を示す・・・を呼び出し、サーヴァント従者として従え、敵のサーヴァントを自身の英霊を使って消していき、最後の一人が聖杯を手に入れるというそんな儀式だ。

そして今、此度の聖杯戦争に呼び出されようとしている、一人の英霊オトコがいた。

男が目を開けると、そこは空の上だった。

高度50m、すぐ下には日本の家屋らしからぬそれなりに大きな古い洋館が一つ。

自身の状況は、自分を召喚した媒体である聖杯から知識として授けられている。だが、しかし、この状況はあまりにも与えられたものとは違っていた。

マスターは通常、血を用いて描いた魔方陣で英霊を召喚し、マスターの前にそこから現れるものであると、男に与えられた知識ではなっていた。

だが、今男は落ちている。そう、高度50mの上空から、マスターがいるらしき館に向かつて落ちている真つ最中なのだ。そんな状況であるにも関わらず、此度の聖杯戦争において騎乗兵ライダーのクラスとして召喚されたこのドイツ人の英霊は、にやりと、嬉しそうな笑み

を口元に浮かべて思考した。

（はは、全くなんでことだ。なんてマスターだ。いきなり、上空に放り出すとは、実に愉快！とんだ大物だ、そうではないか）

思いながら魔力を身に纏って落下に備える。生前はこんなものとは全く縁がなかった身ではあるが、今の男の体は魔力で構成されている。人の姿をしていても、人ならざる者。それが今の男だった。

そして、元々この男は常人では測れぬ器の持ち主でもあった。

ライダーのクラスとして召喚された男の得物は爆撃機であり、爆撃機乗りであつたわけだが、そんな中、生前は実に30回ばかり撃ち落されたことがある。そして、敵の真っ只中に墜ちようとも、自分にかけられた賞金10万ルーブル（現在日本人収入換算で約5億円）狙いのハイエナどもに命狙われようとも、軍用犬が自分を搜索していようとも、どんな時でも生きて自力で仲間の元へ戻ったという経験を持つ男にとってみれば、既に人間ではない体を得ていることもあつて、こんな50m上空からいきなり落とされたところで、別段大した脅威でもなかった。

普通はこのあまりに無茶な召喚から召喚主への怒りを覚えてもおかしくないはずなのだが、彼の場合、寧ろこの状況を楽しんでいるとさえ言っている。

体にかかるGの感覚が懐かしくて嬉しい。死んでからはほとんど無縁の感覚だった。ああ、帰ってきたんだ。自分は生者の世界に帰ってきたのだと、また愛機に乗って飛べるのだと、思つて男は震えた。武者震いだ。相手がソ連のアカ共じゃないのが惜しいところだが、それでもまた飛べるということが単純に嬉しかった。こんな、落下などどうでもいいくらいに嬉しかった。男にとってはそれだけのことなのだ、このイレギュラーな召喚は。

かくて、男は館に激突する。

その日、冬木を管理するセカンドオーナーにして、遠坂家6代目当主遠坂凜は英霊を召喚するための儀式に挑んでいた。目指すは最優のサーヴァント、剣使い^{セイバー}。

狙ったカードを必ず実力で手に入れてやると意気込んで行った英霊降臨の儀。しかし、儀式を終えても光を放つ魔方陣からは何者も現れず、代わりに耳に届くは、居間から響く爆発の音。

「なんでよー!？」

わけがわからないままに、駆け上がり、居間に向かって疾走する。「扉、壊れてる!？」

がちやがちやと歪んだ扉に手をかけ、埒が明かぬと判断するまでの時間はとんでもなく早かった。

「ああもう、邪魔だこのおっ……!」
言いつつ、扉を蹴破る。

そうして見たもの。既に元の面影がなくなった、残骸だらけの居間と、その廃屋にてにこにここと笑顔を浮かべて佇む、彫りの深い顔立ちに高い鼻の西洋人らしき男。

その服装といえば、黒い軍服にどこぞで見たような十字を首元につけている。はて、どこで見た格好か。わりと有名な格好のような気はしているのだけれどと内心ちよっと思いつつ、深く考える前に男に言葉をかけられた。

「問おう。君が私のマスターかな？」

直立の姿勢で右手をピンと張り、一度胸の前で水平に構え、それから腕を斜め上にするドイツ式の敬礼をして、案外と静かな瞳で年若い少女を見つめる西洋男。それに面食らった。

先手を取られた。遠坂凜は、勝気な少女で攻め手にまわるとんでもなく強いが、逆に受身になると途端に弱くなり、ふいをつかれる行動にも弱い特質をもっていた。

サーヴァント相手にはどっちが主従かはつきりさせるためにも、毅然とした態度で臨みたいと思っていたにも関わらず、つい動揺を表に出して「え？ええ」とそんな返事を返してしまった。言っただけで口を押さえてももう遅い。わたしのマスターの威厳がなんて思いつつ、つい、反射的に頬を赤く染める。その様子を見ながら、目の前のサーヴァントらしき男は「うむ、実に惜しい」とかなんとかぼやいている。

「君があと5歳ほど若かったら私の好みストライクだったんだが」
いや、何の話してんのよアンタ、と凜は思わず内心つつこんだ。皮肉なことに、それで彼女は我に返った。

「・・・ッ、確認するけど、アンタはわたしのサーヴァントで間違いない？」

先ほどの発言といい、出来れば間違いであつたほうがいいなとか内心思いつつ、そう尋ねる。たぶん、こいつロリコン。間違いなくロリコン。

「うむ。私が君のサーヴァントだな。それで君が私のマスターというわけだ。本当はあと10歳くらい若いマスターのほうが嬉しかったが、まあ、君もわりと幼く見えるし、悪くはない」

いや、だからアンタ何の話してんだ。ていうか、10歳って、さつきは5歳っていつてたのに、更に若くなっているのはどういうことだ、ごら。もしかしなくても本物のロリペド？いや、考えたくない。自分のサーヴァントがそんな変態なんて嫌過ぎる。と、凜は思うがそこで無理矢理思考を打ち切った。いや、本気で考えたくないから。自分のサーヴァントが筋金入りのロリコンの変態なんて。

「〜!!そ・れ・で!クラス、何!？」

相手のあまりにアレな言動を前につい逆上しそうになりつつ、凜がそう怒気を孕ませながら聞くと、この軍服を身に纏ったサーヴァントは、「ライダーだ」とそう答える。

「私にライダー以上に似合いのクラスもないだろう」

という言葉はなんとなく誇らしげで自信有り気ではあつたが、セ

イバーを狙っていた凜としては、あまり嬉しくはない。

「ドジったわ。あれだけ宝石を使っておいてセイバーじゃないなんて、目も当てられない」

つい、苦い声でそんな言葉を漏らしてしまう。

それを耳ざとく聞いていたのだらう、男は本当に不思議そうな顔をして、「む？君はセイバーを狙っていたのか。それは何故かね？なんてことを尋ねてきた。それに凜はむっと眉を寄せながら「何故って聞くまでもないじゃない」と、苛立たしげに口にする。

「わたしは後方支援がメインの魔術師よ。どうせ組むなら剣と魔術の組み合わせのほうが映えるし、なによりセイバーのクラスは最優と呼ばれているわ。どの聖杯戦争でもセイバーのクラスが最後のほうまで残っているのがなよりの証拠よ。どうせひくなら誰だって最強のカードを望むものでしょ」

そう口にする、ははつと男は笑いながら、「君はおかしなことを気にするのだな」なんてことを言い出した。

「どという意味よ」

「剣^{セイバー}使いなど、撃ち落せばそれで終わりではないか」

至極あっさりと、当たり前のようにきっぱり言い切った男。

その顔に、なんだか嫌な予感を覚えて凜は尋ねた。

「アンタ・・・聞き忘れていたけど、どこの英霊？真名は？」

「私かね？私はドイツ空軍、スツーカー部隊、ハンス・ウルリッヒ・ルーデルだ」

「・・・」

(・・・誰?)

遠坂凜は魔術師である。魔術師とは神秘を追うものであり、その性質は過去に向かっている。故に大昔の英雄の伝承にはある程度通じてはいても、現代や近代の英雄のことは詳しく知ってなどいなかった。寧ろ現代や近代で本当に「英雄」と呼ばれるほどのものが生まれるのかすら疑わしく思っているくらいだ。故に、ドイツ空軍のスツーカー部隊のルーデルだのいわれても、さっぱりわからなかった。

ただ、見覚えのある制服デザインとドイツの名前で、流石に相手がナチスドイツ時代の軍人であることには気付いたのだが、それ以上は本当にわからない。

まあ、この男のことを詳しく知っているのは日本でも極一部のお兄さん方くらいのものであるだろう。

だから、名前を言われてもわからなかった凜のことは、わからなくても責められないだろう。多分。

「スツー・・・？なにそれ」

「うん？爆撃機の種類だが、知らないのか」

「知らないわよ、そんなの」

参った。真名がわかれば戦力もわかるっていうのが通説だけど、全然名前を知らないとなると戦力の把握もなにもない。なんか頭の痛い展開になってきたと思いつつ、尋ねる。

「・・・確認なんだけど、貴方の戦力って具体的にどうなの？生前貴方って何をしてきたわけ？」

ふむ、と男は思索して、それからあつきりした様子で言う。

「戦時中は朝起きて牛乳のんで出撃して、朝食食って牛乳のんで体操して出撃して、昼飯食って牛乳のんで出撃して、夕食食って牛乳のんで出撃して、シャワー浴びて出撃して寝るという生活を繰り返してきただけだな」

って、ただだけ出撃してんのよ！というか、牛乳好き！？牛乳好きなの、それ！？っていうか、言ってることが冗談染みているんだけど、もしかして、わたしからかわれている！？そっなの？なんてことをぐるぐる考えながら、据わった目でじろりと凜は目の前の男、ルーデルを見上げた。

「あのねえ、ライダー！怒るわよ？わたし、具体的につて言ったでしよ」

言つと男はまた思索したような顔をしてから、流れるような早さで言葉を並べた。

「生涯の出撃回数は2500以上で世界一の戦車撃破王ということ

になっているな」

2500回以上出撃って、どんだけ出撃しまくったのよこいつとか思いつつ、その中で無視出来ない言葉があったので、そのことについて確認をとる。

「・・・ということになっているってことは、実際は違っていること?」

「まあ、そんなことはどうでも良からう。それより牛乳はないのか?」

「・・・は?」

「ごそごそと、男は台所のほうに移動しながら、冷蔵庫を開けて、勝手に牛乳を引っ張り出す。

「って、アンタ何勝手に家捜ししてんのよ!?!」

「はは、やはり、牛乳がなくては調子が出なくてな」

いいながら男はマイペースにゴキユゴキユと牛乳を喉を鳴らして飲み干した。

「む・・・いかな。紙パックとは如何なものか。あまり上質じゃないぞ、この牛乳」

なら、飲むな。

「ライダー・・・あのねえ」

ぴきぴきと、怒りに青筋を立て始める凜。それに対して男はのんびりと、「ん?なんだ?君も飲むかね?」とか阿呆なことをほざいてきた。

「いらぬわよ!」

「そうか」

どことなく残念そうに見えるのはどういうことだ、ごらと凜が思うのは多分仕方ないことなだろう。うん、多分。

「それで、再び聞くけど、ライダー。貴方って生前具体的に何をしたの」

凜は男をじとりと見上げつつそう苦い声で言った。戦車撃破王とか言われても、それだけで戦力がわかってたまるか、とそんな気持ち

ちだ。

「む？そんなに気になるのか。君は本当におかしなことを気にするのだなあ」

「はは、とかいいながら牛乳を飲む手は休めない。非常にマイペースである。」

「しかし、前途した通りだよ。私がやったのは、アカ共を戦車といわず、装甲車・トラック・戦艦問わずに爆撃しまくっただけだ」

「はい？戦艦を爆撃？すると、何かを思い出したのか、ルーデルは眉を顰めてこんなことを言い出した。」

「まあ、あまりにやりすぎたせいかな、まわりには地上勤務しろだの、いい加減休暇をとれだの、暫く出撃禁止だのといわれることも多くて参ったものだがね。けしからんとは思わないか？休暇なんぞいらんから出撃させろというのだ。私は一つでも多くのアカ共の戦車を破壊してやりたいというのに、なのに休暇をとらせようとしてくるなんて。まあ、病院を抜け出して出撃したがね！」

「いやいや、アンタどんだけ出撃好きなんだ。というか、それって上官命令無視していたの、そうなの？と凜はあまりの男の言い分について一歩後ずさる。」

更に男はぶつぶつと嫌なことを思い出したのか、おそらくは愚痴であろう文句を吐き出していく。

「総統閣下などは、頼むから地上勤務してくれーっとか何度も懇願してきたものだが、うむ、嫌ですと蹴ってやった。あとついに私に渡す勲章がなくなったとか言うのでな、親愛なる総統閣下は宝剣付黄金柏葉騎士鉄十字勲章なるものを新たに作って私に寄越そうとしてきたのだが、それを受け取る条件として「二度と私に地上勤務しろといわないのなら受け取りましょう」といったときの、あの顔はいいやあ・・・見物だったよ」

ちよつとまって。ちよつとまで、総統閣下って、やっぱりアドルフ・ヒトラー？ていうか、勲章を新たに作って？あのヒトラーに懇願されたのこいつ？え？思っていた以上に凄い駒もしかして引

いた・・・？

「ま、私のことはそんなものだ」

ぷはつと、牛乳を飲み終え、人心地ついたらしい男はそんな言葉で、説明を打ち切った。見れば、牛乳を飲み終えた男は今度はなにやら体操をはじめめる。いや、なんでこんなところでそんなのやりはじめるとおかしなことになりそうだったので、理性を総動員してやめた。なんていうか、こいつが自分のサーヴァントじゃなかったら、関わりたくない。

痛む頭を抑えてなけなしの理性で、凜は、「そ・・・そう。それで、アンタの宝具は？」と口にした。

「うむ。私の愛機ほくだな！」

ぱつと男がその質問こそまっていますと言わんばかりの輝ける笑顔で顔を上げる。次の瞬間、壊滅しかけていた居間が更に全壊した。

「勿論、私の長い戦場の相棒、こいつ『J U 87スツーカー』だよ！」

すさまじい音を立てながらプロペラをまわす、なんか旧式の爆撃機がそこにあった。

「さて、マスター。私の話はもう聞き飽きただろう。それで、ここからが本題だ。先ほど私の具体的な戦力が知りたいと言っていたな？ならば話は早い」

「ごきごきと音を鳴らしながら、体操の最終仕上げをして、につこりと笑顔で楽しげに語る目の前の男。凜は嫌な予感がして、思わず一歩後ずさる。

「今すぐ私と出撃だ！！」

「なんでよー！ー！？」

凜は全力でつつこんだ。男は意にも介していない。

「共に出撃すれば、私の戦力は自ずとわかるだろう。それに、敵が

現れても問題はない。全部撃ち落してしまえばそれで終わりだ！」

「ちよ、冗談じゃないわよ。そんな危ない橋渡れるものですか」

たじろぐ凜、段々近づいてくる西洋男。

「遠慮することはない。何、相手が剣使いセイバーだろうと問題はない。見事私が爆撃しよう。君は自分が引いた駒が最強でないと嘆くこともなくなる。名案だろう？君はただ、私の後ろの席に乗ればそれでいいのだ」

ゴーイングマイウェイ。既に男は凜の反応など気にしちやいない。「それに、私を遙か上空50mから叩き落した手腕、君にはきつと才能がある！それにこの戦争はもう始まっているのだ。ならば休んでいる暇などはない。さあ、行こう。共に勝利をつかむのだ、マスタ―」

言いながら男はがしつと、凜の肩を掴んでそのまま自分の愛機スツーカーに向かつて歩き出した！。

「嫌ああー！ー！おろしてよ、この馬鹿ー！ーッ！」

「さあ、出撃だ！ー！」

こうして、アカイアクマと呼ばれるはずだった少女と、ソ連人民最大の敵だのスツーカーの悪魔だのといった称号をもつ男は旅立った。さて、この二人の後がどうなったのか。それは、他の聖杯戦争参加者と聖杯のみが知る。

終われ。

(後書き)

ここまでご読いただいたきありがとうございます。
ついでにその後の聖杯戦争妄想。

とりあえず、マーボー神父がバゼットから強奪するランサーは、Fate EXでも出てきたが、クラスと年齢を変えて李書文先生。ランサーの兄貴と違ってなんだかノリノリ。

士郎が召喚するのは、アーチャーかアサシンで召喚されるシモ・ヘイヘ。その実直で寡黙、努力家で地味な作業にも地道に向き合うヘイへの在り様に深い感銘を受ける士郎。ついでに、身長152cmなヘイヘに、身長コンプレックスもっている士郎は妙な安心を感じてしまった(おい)。というわけで、気付いたら士郎になつかれるヘイヘ。凄腕リアル・チートだけど命令に忠実な男、ヘイヘは士郎の意思を尊重して動くと思われ。個人的に本命。

本来はアーチャーのクラスしか該当しない筈なのに、あまりに魔術適正がない奴らばかりなせいで、イレギュラーにキャスターのクラスとして桜に召喚されるエミヤさん。状況に戸惑いつつ、気付けば素敵に執事さん。エミヤさんのことは大好きだが、多分こいつはやっぱり途中で誰かを助けるために消えていく運命だと思う。だからきつと途中リタイア。

アインツベルンによってセイバーのクラスとして呼び出される船坂弘さん。そのあまりの不死身っぷりと、戦闘続行EXっぷりに周囲ドン引き。ターミネーター・・・げふんげふん。自爆しても普通に復活するよ。

ちなみにバーサーカーはスターリン・・・げふんげふん。スターリンフルボッコフラグが立っている気がするのは多分気のせいでもなんでもないよ。

とかとかそんな感じ。うわお、夢が膨らむ。そんなリアル・チート共による聖杯戦争が凄く見たい。以上。出来たら誰か書いてくr・

•
(強制終了)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7109w/>

ルーデル閣下が遠坂凜に召喚されたようです

2011年9月17日10時02分発行